

カントの歴史哲學(二)

米田庄太郎

三 歴史哲學と社會學との關係に關する愚見

歴史哲學と社會學との關係に關する現今の諸見解の主要なるものは、前節に於て述べしが如きものであると思ふが、然らば余自身は此の問題に於て如何に考へて居るか。茲に愚見の大要を簡單に述べて置かうと思ふ。

今歴史哲學と社會學との關係と云ふ問題に於て、從來諸家の呈出せる諸見解は、大體上二箇の見地より立てられたるものである。一は先づ一定の學問論上より歴史哲學の概念を決定し、夫れより其の概念に照らして社會學の概念を決定し、而して兩者の關係を見定めんとするもの、二は之れに反して先づ一定の學問論上より社會學の概念を決定し、夫れより其の概念に照らして歴史哲學の概念を決定し、而して兩者の關係を見定めんとするものである。要するに前者は歴史哲學の概念の決定を主とし、之れに従屬せしめて社會學の概念を決定して、以て兩者の關係を見定めんとする

もの、後者は之れに反して社會學の概念の決定を主とし、之れに従屬せしめて歴史哲學の概念を決定して、以て兩者の關係を見定めんとするものである。而して何れも先づ一定の學問論を基礎として居るが、然るに其の基礎とする學問論を詳しく吟味して見ると、一般に其の學問論は見掛上考へられる程、實際に於て無關心的な客觀的なものでないことが發見される。即ち一定の意味に於て歴史哲學の概念を決定せんとする人々は、夫れに都合よい様な學問論に基づき、或は特に此の如き學問論を自ら立て、夫れより議論を進めて居るが、之れに反して一定の意味にて社會學の概念を決定せんとする人々は、又之れに都合よい様な學問論に基づき、或は特に此の如き學問論を自から立て、夫より議論を進めて居ることが、發見されるのである。つまり一種の手法が行はれて居るので、始め潜かに隠して置いたものを、論理的展開によりて引き出さんとする傾向が認められるのである。されば單に表面上より見れば、堂々たる客觀的な純論理的な概念決定の如く思はるゝが、其の實は根本的に一定の主觀的動機によりて支配されたる論辯であると思はれるのである。

余は社會學及び歴史哲學の概念決定、并に兩者の關係の決定に付て、諸家の呈出せる諸見解に於て、一般に右の如き事實或は傾向の存在することが認められると信じ

たから、余自身は社會學の概念を學問論上より決定せんとするに當て、自分は社會學を專攻せんとするものであると云ふ念を、一時全く余の心より排除し、而して社會學に付て何等の豫めの觀念を抱くことなく、純學問論上より學問の一般的分類を試み、純學問論上よりの純論理的推究の結果として、果して社會學なる獨立なる學問を新たに建設するの必要が承認されるや否やを、先づ吟味せんと企だてたのである。併し茲に余の學問論を論述する暇がなく、且つ只其極一般であるが余は嘗て日本社會學院年報第一卷第一冊に於て公にせる「社會學の概念」中に之を論述して置いたから、(但し其後種々修正を加へたので、今日では其中に述べた儘を固持して居らないが)茲には、只如何なる結論に達したかを、簡單に述ぶるに止めて置くが、要するに余は其研究の結果として、社會現象或は社會生活全體を全體的或は一般的并に根本的に研究し、又社會生活に關する一切の學問の認識論的方法論的問題を研究する科學として、一の獨立なる科學を新たに建設するの必要は、論理的に承認されざるを得ないと考へるのである。即ちかゝる學問は純學問論上論理的必然的に建設されねばならぬと考へるのである。而して之に社會學と云ふ名稱を與へるのが、如何なる他の名稱を與へるよりも、穩當であると考へるのである。此くて余は社會學の一般的概念を

決定して、是れつまり社會現象或は社會生活の全體を、根本的并に全體的或は全般的に研究し、又社會的學問の認識論的方法論的問題を研究する科學であると云ひ、而して社會學を大體上社會的學問の認識論的方法論的問題を研究する組織社會學と、社會現象全體の根本的事實を抽象的に研究する純正社會學と、社會現象或は社會生活全體を具體的全般的に研究する總合社會學との三大部門に分たんとするのである。但し余は學問を根本的に理學と實學とに大別し、理學とは認識の學問にして、原理と法則との發見或は確立を主旨とし、實學とは評價或は價値の學問にして、理想と規範とを確立することを主旨とするものと觀念し、而して社會學を以て理學の一大部類と認めて、上に述べし如くに其の概念を決定し、又た其の部門別を立てんとするのである。

今余が學問論上より論理的に當然到達さる可きものと信ずる右の社會學の概念及び部門別によりて、前節に述べし諸見解を考察して見ると、先づ人類の發達或は社會の進化を考究するを以て、其の任務と見る歴史哲學の概念は、余の總合社會學の社會進化及び文化發展論の部に合致するものにして、つまり余の總合社會學の概念中に吸収されることとなる。此くて人類の發達或は社會の進化を考究するものとし

ての歴史哲學は、獨立なる學問ではなくして、社會學の一部分となるのである。次に人類社會の狀態を生起變動せしむる過程を、考究するものとしての歴史哲學の概念も同一の運命を受ける。次に社會學の結果を總括する學問と見る歴史哲學の概念も、矢張り余の總合社會學の中に吸收されることになる。次に歴史哲學と社會學とは實質的には、同一の學問にして、而して歴史哲學と云ふ名稱は、種々なる理由によりて社會學と云ふ名稱よりも、一層穩當であると見る見解は、社會學の職分を余が總合社會學の一部分と見る社會進化及び文化發展論だけに、制限せんとするものにして、適切なる見解でない、社會學は總合社會學の部門に於ても、社會進化及び文化發展論以外の部分をも有するものにして、之れだけと同一視するさへ穩當でない。況んや社會學全體を右の如くに觀念する歴史哲學と同一視せんとするは、大なる謬見であると思ふ。要するに此の見解も正當に解すれば、歴史哲學を以て總合社會學の一部分と見ることに歸着せねばならぬ。尙ほ歴史哲學は演繹的構成法を用ひ、人生の究極原理と普遍的法則とを考究する學問と見る見解は、歴史哲學を價値の學問と見る見解の粗雜なるものにして、其眞價は歴史哲學を價値の學問と見る見解によりて、決定されるものと思ふから、後に論ずることとする。要するに歴史哲學を以て人類の

發達或は社會の進化を考究する學問と見る見解は、其の種々なる形態に於て、總て余の總合社會學の中に吸収せられ、獨立なる學問としての存立を失ふものである。

次に歴史哲學は認識論的學問にして、歴史に關する認識論的諸問題を考究するものであると見る見解は、大體上余の組織社會學と稱する余の社會學の一部門に當るものにして、少くも余の社會學の概念から見れば、獨立なる學問ではなくして、矢張り社會學の中に吸収される可きものである。

終りに歴史哲學を價値の學問と見る見解、及び認識論的及び價値論的學問と見る見解に就て考究して見ようと思ふが、先づ歴史哲學を單に價値の學問と見るに於ては、夫れは余が實學と稱する學問の根本的一部類に屬するものにして、社會學の如く余が理學と稱する學問の他の根本的一部類に屬するものとは、其の學問的性質を異にするものである。而して其の名稱は歴史哲學と稱するがよいか、どうかは問題であるが、とにかく實質上から見て、價値の學問としての歴史哲學の概念に當る一の學問が、實學の部類に屬する一學問として成立し得ると思はれる。尙ほ歴史哲學を認識論的及び價値論的學問と見る概念を、特に其の最も完成されたる形態、即ちメモリス氏によりて展開されたるが如き形態に就て考察するに、余は先づ同氏の歴史論理

と稱する部門は、余の組織社會學と稱するものに屬すると思ふ。次に同氏が歴史的價值論と稱する部門は、余が實學の一部類たる理想學イデオロギイに屬するものと思ふ。(但し余は實學を其本質上より見て、根本的に理想學と規範學ノルマモギイとに別ち、又之を對象上より見て幾多の學問に別たんとするものである。)而して同氏が世界史或は普遍史と稱するものは、其の外形に於ては大に總合社會學中の文化發展論に類似して居るが、併し其の主旨は單純に文化發展を認識せんとするのではなく、之を目的論的或は價值論的に評價せんとするのであるから、社會學の文化發展論とは學問的性質を異にして居る。されば余はメーリス氏が歴史的價值論と稱するもの、及び普遍史と稱するものを合せて、實學に屬する獨立なる一學問を構成することが出來ると信ずる。之を歴史哲學と稱するに就ては、余の學問論上より見て、異論を起さねばならぬが、併し夫れは名目上の問題にして、實質上に於ては、余は右の如き一の學問の成立し得ることを信ずるものである。

余は以上述べ來りし如く、余の社會學の概念及び部門別けの上から見て、認識の學問たる理學、即ち原理及び法則の學問としては、歴史哲學なるものは、今や全然其の存在の理由を失なひ、社會學中的一部分として、其の部門の何れかの中に没却するもの

と考へるが、併し價値の學問なる實學、即ち理想及び規範の學問としては、上にメーリス氏の説を批評せし場合に述べし意味にて、一の獨立なる學問として成立し得るものと信ずるのである。

今歴史哲學の概念及び是れと社會學との關係に就て、是れまで述べ來りし事を念頭に於て、是よりカントの歴史哲學を第一節の始めにあげし諸問題に就て論究し、且つ評價して見ようと思ふ。

四 カントの歴史哲學の概念

先づカントは歴史哲學を如何に觀念し、而して如何なる問題を考究するものと考へたかを、考察して見よう。

前々節に於て述べし處によりて知らるゝ如く、今日の學界に於ては歴史哲學を以て認識論的學問と觀念し、而して歴史の認識論的問題、歴史記述の方法論的問題を考究するものと見る傾向は大に發達して居る。然るにカントは近世認識論の始祖とも云はれて居るのであるから、彼は自然科學の認識論的基礎を究明せんと企てたと同様に、少くも歴史科學の認識論的基礎をも究明せんとする考へを、抱いて居つたで

あらゆる想像するは敢て無理ではないと思ふ。而して彼のかゝる考へは何處に於て最ともよく窺はれるかと云へば夫れは彼の歴史哲學に關する思想に於て、あらゆる想像されるのも亦敢て無理ではないと思ふ。此くて今日カントの歴史哲學を研究せんとするものが、殊に此點に注目し、西南獨逸派の新しき貢獻と見做されて居る歴史科學或は文化科學の認識論の少くも萌芽が、其處に發見されるであらうと豫期するのも、敢て無理ではないと思ふ。實は余がかねてカントの歴史哲學を研究して見たいと云ふ考を抱いて居つた理由も、主として其の點にあつたのである。殊にラムブレヒト氏が其論文 *Herder und Kant als Theoretiker der Geschichtswissenschaft* に於て、カントの歴史哲學を批評するに當つて、其重要な缺點として、彼は彼の時代に固有であつて、而して今日では全く維持され難くなつて居る處の、個人及び社會に關する一定の根本思想に感染して居つたと云ふ事及び彼は目的論的思想を引き入れることによりて、彼の經驗的一元論に破綻を生ぜしめ、精神的因素をあまりに過重することによりて、經驗の權利を抑制したと云ふこと等を擧げて居るのを見て、ラムブレヒトがカントの目的論的歴史觀を非難して居るのは、是れカントの見解は彼の自然科学的歴史觀とは大に異なれるが爲め、彼は正當に之を評價することが出来ないから

て、若し深く之を研究すれば、其處に歴史科學の認識論の根柢或は萌芽が、發見されるのであらうと云ふ感じを大に強めたのである。併し余は未だ自から直接にカントの歴史哲學を研究する暇を得ない中に、メーヂクリス氏のさきに擧げたる論文に接し、余の希望は全く水泡に歸す可きものであることを學んだのである。

今メーヂクリス氏の研究によりて見るに、歴史哲學を以て歴史科學の認識論的問題、歴史研究の方法論的問題を考究するものと見る様な考へは、遠くカントの視界外にあつたのである。カントは歴史哲學的研究は、全く歴史的方法に關する研究を含まないものと考へて居つたので、彼は歴史的经验の概念に於て、如何にして純正自然科学は可能であるかと云ふ問題が解決された後に、尙ほ未解決に残つて居ると思はれ得る何等かの認識論的問題を、發見しようとしたと云ふ證據は、全く存在しないのである。而して此の事は、彼が殊に歴史の認識論的問題を論究したものゝ如く思はれる論文²⁾は、如何にして歴史は先驗的に可能であるか (*Strait der Transzendenzen*) によりて、最もよく證明されて居るのである。吾人は此の論文によりて、彼は自然科学的经验に對して起せると同様な認識論的問題を、歴史的经验に對して起して居らなかつたことを、明らかに學び得られるかと思ふ。要するにカントは、今日多くの哲學者や

歴史學者の考へる如くに、歴史哲學を以て一の認識論的學問と見る見解を、全く抱いて居らなかつたのである。然らば彼れは積極的に歴史哲學を如何に觀念して居たか。

先づ彼は彼のジステム内に於て、歴史哲學に如何なる地位を與へたかを考へて見よう。矢張りメーテクス氏の研究によりて見るに、カントは歴史哲學を倫理學と密接に結び付けて居つたことは疑はれない。併し夫れ以上に詳しく歴史哲學の地位を決定することは容易でない。全體カントが歴史哲學の事を論じて居るのは、一般に實際哲學上の著述に於てである。又其中で特に歴史哲學上の問題を論じて居る部分は、倫理哲學的性質を有するものである。而も彼の倫理學上の二要著、*Die Grundlegung zur Metaphysik der Sitten* 及び *Die Kritik der historischen Vernunft* は此の問題の研究に有力なる資料を與へない。更に彼の歴史哲學的著述は、殆んど全く、通俗的性質のものである。されば夫れに如何程の學問的價值を認む可きかも、問題となるのである。要するにカントの哲學的體系に於ける歴史哲學の地位を、詳しく決定することは、たやすき業ではないのである。而も全く不可能ではないと思はれる。

今カントは彼のジステムに於て歴史哲學に如何なる地位を與へ、又之を如何に觀

念せんとしたかを考究するに當つて、直接に最も有益なる資料を呈供するものは、形而上學の進歩に關する彼の遺著であると思はれる。本書の中には彼の歴史哲學的思想の概略を述べ、又明らかに歴史哲學を倫理的的目的論に屬するものと觀念して居る。而して其の歴史哲學の概念は、彼が他の著作に於て歴史哲學的問題に就て述べて居ることゝ一致し、且つ其の意義を最も明白に云ひ表はせるものと思はれる。夫れで茲には主として右の遺著によりて、彼の歴史哲學の概念、並に其の問題に關する彼の思想を究明することゝしたいと思ふ。

夫れカントの考ふる處によれば、歴史哲學は先づ實際哲學に屬する一學科である。此くて其の主題は實證科學としての歴史でないことは明らかである。蓋し若しそ
うであらば、歴史哲學は理論的學問とならねばならぬからである。而して歴史哲學の主題となる可きものは、寧ろ見渡し難き時の流れの中に進行する人メンシヒト類カタクの存在の意味である。即ち歴史其物ではなくして歴史の意味、科學としての歴史に對立せしめて見らるゝ現實なる歴史或は事變其物の意味である。更に此の歴史の意味は歴史から發見さる可きものでない。若し此くの如くにして、歴史の意味を發見せんとするに於ては、矢張り歴史哲學は理論的學問となる恐れがある。而して歴史哲學は

人類の歴史的存在は、意味あり、價值ある或物として考察され得る、否な考察されねばならぬことを、實際的主意に於て、先驗的に確立す可きものである。

併しカントが歴史の意味を確立せんとする其の企だては、只歴史の形式に關してのみ先驗的と稱し得られるので、歴史の内容に關しては然るを得ないことは明らかである。彼は人類の概念を經驗より取り來り、而して根本的には「人類學」に於て之を展開させて居る。而も彼は總ての分析的判斷に付て、其の材料に用ひられる概念は經驗的のものであるにせよ、又ないにせよ、其等の判斷其物は其の本質上先驗的知識であると云ふと同一の權利を以て、歴史哲學に付ても、亦夫れは或程度に於て一の先驗の手引を有つて居ると云ひ得るのである。然らば其の先驗の手引と云ふは如何なるものであるかを考究するに先だち、カントは彼の「人類學」に従うて人類の性質を如何に觀念したかを、少しく考究して置きたいと思ふ。

夫れカントに従へば、生きたる自然の體系に於て、人間を特質づけて他より區別せしむるものは、即ち人間は己れ自身で、己れ自から造る一の性質を有つて居ると云ふことである。是れ人間は己れ自から立てた目的に従うて、己れ自身を完成する力を具へて居るからである。而して之れによりて人間は、理性能力を賦與されたる動物

Animal rationabile として、己れ自身から己れ自身で、理性的動物 Animal rationale と成り得るのである。人間は自然より理性的實在物の素質を受けて居るが、併し其等の素質を具へて居ると云ふだけでは、まだ理性的實在物 Animal rationale ではない。其等の素質の總體は只 Animal rationabile を構成するだけである。而して人間は己れ自身で己れ自から現實なる理性的實在物、Animal rationale とならねばならない。茲に吾人は自然科学的考察から目的論的考察へ、人類學から倫理學へ移らねばならないのである。人間の自然的賦性或は素質は、人間に其の運命を示す、即ち其の自然的素質によりて人間は理性的のものとなる可き運命を示されて居る。併し此の人間の運命は如何なる時代に於ても、決して完全に實現され得ないものにして、無限に亘る任務を人間に科するものであると云ふ點に於て、特異なる性質を帯び居る。總て人間以外の動物にありては、各箇體は其運命の全體を實現するが、人間にありては精々の處で、只種屬カフツレンゲのみが之をなし得るのである。此くて人類は只見渡し難き多數の世代の連續に於ける進歩によりてのみ、自己の運命を開展し行くことが出来るのである。

以上述べしが如くなるを以て、吾人は人類の運命の考察に於けるカントの人類學ダス、ヒストリーツン、エの結論を簡單に總括して、左の如く云ふことが出来ると思ふ。即ち人類は歴史ヒストリー的

生^{レ、ベウエーゼン}物にして、而して歴史を有する生物と云へば只人類あるのみである。但しカント自身は此の如くに明言して居らないが、併しかゝる人類概念は彼の思想の中心に存在して居るばかりでなく、獨逸理想主義哲學の中心に存在して居ると思はれる。要するにカントを始め獨逸理想主義哲學者全體の考ふる處によれば、人類は歴史を有する生物にして、而して其の歴史を有する所以は、是れ人類は理性を發達させる素質、己れ自身で己れ自から目的を設定する能力を有するが爲め、即ち其の運命は自由であるが爲めである。此くて歴史とは自由の歴史であるのである。

カントの考ふる處によれば、人間は、其理性によりて人間と社會をなす可く決定せられ、又其の社會に於て藝術及び學問によりて教養せられ、文明化し倫理化す可く決定されて居る。人間が幸福と稱する安寧及び安樂の刺戟に、己れを受働的に委ねんとする其の動物的傾向は、如何に大なるにせよ、人間は自己の性質の粗野なることから彼に附着する種々なる障害と奮闘して、己れを人間たるに値ひするものとなさんが爲めに、能働的に活動するものである。而して今右の如き人類概念から考ふれば、カントが歴史哲學の目的とする處の、歴史の意味とは何であるかを、明らかに理解することが出来ると思ふ。要するに歴史の意味は、つまり人類が上に述べしが如き方

針に於て、進み行くことにあるのである。批判的な言葉を以て云ひ換ふれば、歴史が意味を有するかと云ふ問題は、人類は其の運命に向て奮闘努力するやと云ふ問題と同一である。尙ほ上に述べたるカントの人類觀念に付て、茲に特に注意す可き點がある。夫れは右の人類觀念によりて、カントは彼の先行者、殊に黎明時代の哲學者とは異なる意義にて、歴史哲學的問題を決定したと云ふことである。彼は人類の運命は幸福にあるとは考へず、自然が人性の自由發展に對して與ふる障害と、能働的に闘争することにあると考へ、而して其の見地よりして、上に述べしが如くに歴史哲學の目的たる歴史の意味を決定したのである。更に茲にカントが歴史哲學を倫理哲學に屬せしめたる主意が、其の重要な一點に於て明らかに發揮されて居ると思ふ。夫れは實際的理性の優位 (*Der Primat der praktischen Vernunft*) は文化問題を支配すると云ふ思想である。但しカントが文化問題を倫理的見地の下に考察したと云ふことは、決して文化概念を偏狭なる道德思想によりて拘束せんとしたことを意味するのではない。彼は倫理の觀念を廣大なる意味に解し、價值との關係に於て人生全體を考察することを總て倫理的考察と觀念したのである。此くて彼れにありては、歴史の意味の問題が、人類の倫理的進歩の問題と、同一視されて居ると云ふことは、決して文

化生活の概念を、偏狹な道德的生活の概念に縮少する弊害を生じて居らないのである。(未完)